

燕石  
十種  
駁  
河臺志

四輯

拾

43  
679  
43



679  
43

珠流河  
太位志

燕石十種第四輯卷十

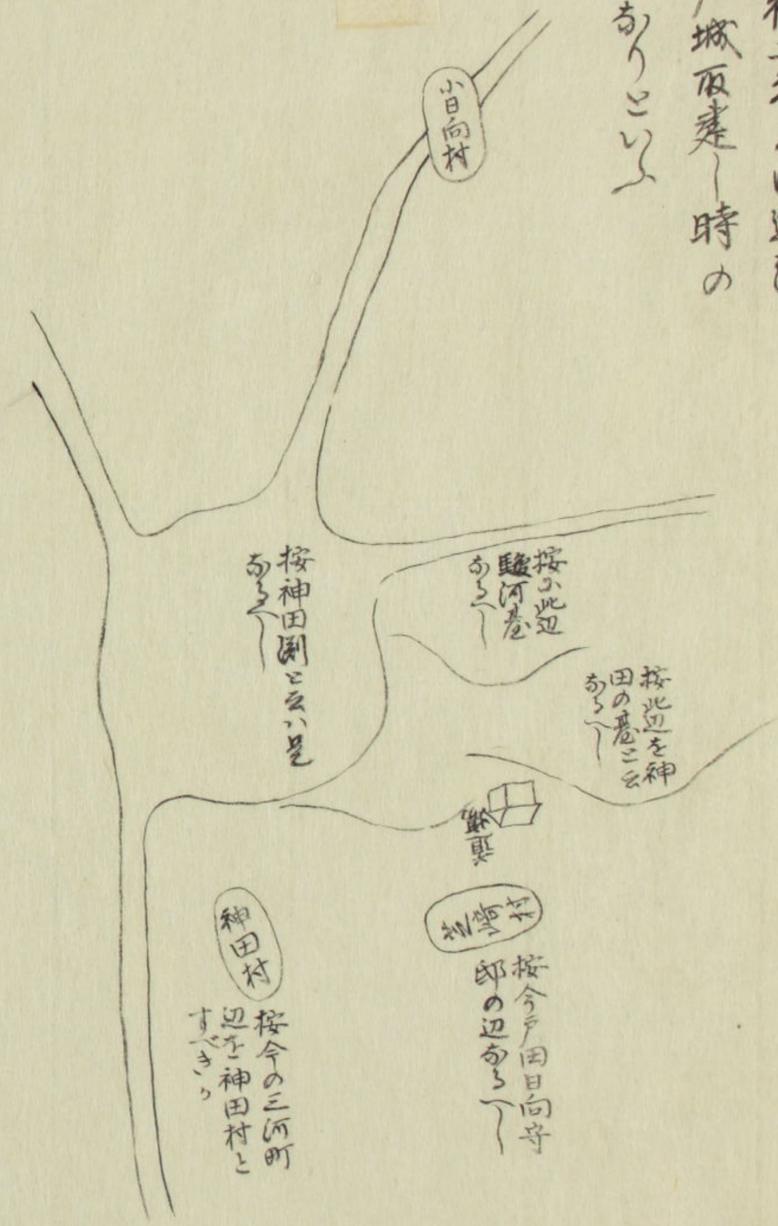
江戸書會

活東子輯

長祿二年壬田道灌

江戸城百建一時の

圖ありといふ



一頁

駿河其志



駿河其志 武藏國豊嶋郡岐田領江戸尾神田町の西北芝崎村の西より  
 東西古町南北三町の高陵あり是を今の駿河巻と云此地の江戸城は  
 鬼門小當りて是より東の東海西の目乃及もぬまも那一城北第一の  
 高陵なり而東を昌平橋を張り西を水道橋ふり南へ七浦 彦比郎  
 土居相模と為浦 中坊所別所近史より甲賀坂とす北へ神田川を境とす  
 南北は條に多し 土居彦比郎より一條府内彦比郎より中川丸陣と忠英朝臣所近一條宇都  
 宮彦比郎より惣坂とす一條昌平橋と中坊所通り一條外へ紅梅坂と池田坂と  
 一條東西小之坊を用く 中坊所通り一條昌平橋と中坊所通り一條外へ紅梅坂と池田坂と  
 一條紅梅坂より觀音寺坂とす一條あり

此地河の左小駿河巻といふ其を詳ありは故老傳々といふ昔時駿河の  
 左番小賜より左小駿河巻といふ又一説少の駿河大紀言忠長殿の御館地と  
 賜りたる名とす又と駿河國の芝崎谷峯を云ふ名とす或を左を御の  
 切といふ其左は是地の諸家の小身ありとも舊功の家柄大切なり 思召左の名  
 といふ此誌説何れも徳ありといふとあり今珍本所を袋町甲賀町を云

寺地あり宇都宮彦邸の松平西橋寺其小の西念寺備隨意院滝川氏  
所<sup>後本</sup> 居安の高林寺あり又橋元小治<sup>元は陸奥守今川</sup> 堀田氏居安元は百姓地  
少く寛政の始まるを年貢地と唱へる由是を考見ると駿河在昔の士ふ  
賜りきりたるを年貢地の有べきや<sup>居安地と</sup>又駿河臣相の賜りし地の  
何とて寺の久安残り有べきや是を疑ひもあらず也富士をうくるも  
あらずに富士見といふ處より更なる名はあらずは不審あることあらずや  
かく古来の傳を信ぜずして自己の考證ありやと尋ねると又更し得るも  
あらずとも北條分限帳の戸芝崎一紙百十七頁に百石文吉田大膳亮又其  
貴江百石指文小口向居安を吉田大膳亮知内入大膳亮書きたる葉崎新堀方  
所領替致由一尋上新古御衣やう高兼う小出の承り由ゆひに記せり  
さて長祿二年の戸芝崎の考はは芝崎村といふ今の宇都宮彦邸の  
地をいふことなり<sup>神田橋といふ伝はかりしをいふことなり</sup> 神田村の内芝崎  
然る時は是駿河を意ひても吉田大膳亮が不知りや吉田が祖駿河也<sup>永享の緒</sup>  
<sup>堀合戦の</sup>

時上杉を庫の清方<sup>りるの屋す</sup> としる時も願へらん吉田は所の名も有るが外に  
以例多くあり今之に馬村<sup>世ふとの者に堀りし</sup> 本戸三河も考範の別業の  
地にかや友人珠水なる者の考ふ考範集に續くまはむの國豊嶋と  
し郡に入にわきたるは久恒たりたる所なり一考ふと録ありて麻のつぎ  
考へずともこの遠き所ありは極く近き所なりとて<sup>近きわつるは</sup> 都人のりり  
て恒より近しけりといふ所なり<sup>と</sup> 考へたるにやかく枕ををこして  
いれども軍師の考ふ所の考ふ所の遠きを算かして<sup>と</sup> 考へたるにやかく枕ををこして  
都人のりり<sup>と</sup> 曉の舟といひするあはれなりかひよといひを麻といひらん  
考範 軒近く麻を考ふ所宿といひ多侍<sup>と</sup> 考へたるにやかく枕ををこして  
是三河の事あり<sup>と</sup> 考へたるにやかく枕ををこして  
以て考範系考作も恒り所にかや此類最多なり長祿二年大田内中も長  
初后入道して道灌といふ上杉家の為なる城を取立んとては江戸城を取立んと  
味方の多くも多ぬるを築くをらんや江戸城も元来吉田が知事あり<sup>吉田家</sup>  
<sup>東合戦</sup>

小笠原道隆十五女の子を嫁し三年丙子に建立  
をいふ世に傳ふる所なり三年とあり

此地明暦三年の大火に焼く後、  
年月 日 小川町 古火せし時袋町

をさすとも類焼く明和九年二月十九日自是より火より火して筋邊橋神田

見所焼失く本町迄延焼く此地も類焼せしとも福原山崎給中氏今給中氏

由新しと消番匠町袋町給中町を焼ず其舟巻の田少く僅の過火いあれ

ともいふも忽ち消静と初らるる事あり是高涼の地ありとあり

此地より信子へ北のあり抱坂小川町北三河町に觀音坂筋邊橋あり昌平の

ハ傍路坂と云番所あり筋邊の塵坂と云番所あり觀音寺坂ハ宇都宮彦彦

と府内彦彦と云二つの番所ありこの町に大滝彦脇の番所あり但し番所ハ彦彦の  
番所より小川町あり

小川町に長崎氏等の侍の番所を攝く抱坂の坂改と坂下に番所あり坂下の侍  
四持番

漸くあふ七つの番所あり中ふ六所の番を鑑く是を十三本の篝ともいふなり

此地南東にさうさうありて袋町堀田氏等の脇より西を絶壁敷大井嶮

より北を神田川の岸切さるる事あり給中町の東より次中地よりで源流る

時の境の是を後を獲るれとも城北の要地なり

甲賀町 火消屋補の所を二丁目と云平賀信濃もる所を二丁目と云又今

胸突坂を寛政四年の江戸圖に甲賀坂とあるを見まは觀音寺坂の通りを

甲賀町といふ名を是を甲賀と云ふ未詳されは火消屋を是と建らる

ゆりて甲賀の者をとるふ命せし事あり甲賀細の者を是地と云れ

といふ所ありと又中川氏等の脇より堀田氏等の脇の路に享保の末の用

かれと見ゆを修り享保七年圖に六所所通せは袋町の所ありとあり

袋町 戸田又助を袋町の事と云是室田年の式體に袋町に甚るる近町

と云地あり袋町師を細を袋のよりと居るを地ハ支配をもとありとあり

ありとありとありとあり

袋町 雁本坂を登り堀田伊勢と茶通りと水道橋迄の同又ハ胸突坂

と中川丸弾と茶袋坂より堀田の茶袋坂迄をハ袋町と云又ハ今河野千太郎

茶袋坂迄の通りありは袋町ありし由さふよりとあり袋町と云并橋火事の時文





よびろくそ例の作り物也其が大燈籠の繪より長崎奉道中の  
體を畫きしより然るる如何あることありあんまの事物を  
畫くことを忘れしより去るも心算もせど有しが危く彼地より荒れ  
病死せらるゝ飯を飯煮りたり是等大燈籠の繪先表といふ處し  
是よりして多礼日と囃子を止らるるなりと感かされし

春日神社 袋町春日馬を名にありし今を堀田伊勢も  
副地ありて春日氏下宮後より社をも又移されし其を副地  
馬場ありあり

防火隊 甲賀町あり  
神田見附 兼近武艦ふ戸田采女心氏信郎神田見附の内角と記

しより寛文十年の江戸圖よ今の松平伊賀も邸の地を戸田采女と書  
り是今の筋遠門をいつとみり筋遠といふを橋の名を見  
り寛文十年の圖よ始て橋の名を見えり然る兼近の武艦ふ

幸多能登と邸を筋遠橋と記す是今の加賀系の手あり然る  
時の神田見附筋遠橋の古き名ある處

九辰年二月廿九日目黒人坂より出火は遠もその災ふかり見附も橋を  
焼失せり天明六年午年には橋が水満ちて昌平筋遠七月十二日の以  
性未をよめらるゝとわやまは神田の事ありと因わまはあらず

昌平橋 筋遠橋の西ふかる寛文十年の繪圖よ始て見えてありし  
橋といふ名は世に先を架せしや古の羊洗橋といひしは流いさか

寛永の島よ見えざるをりてあつたりと云ふ處  
こゝに渡ふよりありの坂を二口坂といひ橋を二口橋といふあり人のいひわ  
る處青物市場のゆるりの坂を羊洗といふと云ふも有ぬと云ふも今  
鎌倉町より布晒といふまゝあり  
後世に布晒橋といふなり  
此橋のうらふ牛車の判れあをいふ寛文十年の  
圖よ舟ありといふ今橋向ふ船宿あり  
澄路及上場に向ふ二軒船宿あり  
まゝに陽橋横町の一軒あり是昔に昌平橋ありしや筋遠外には三軒ありと  
堀昌平橋の東よりあり昌平橋一名相生橋といふ昌平橋は元禄改りの名あり





塵坂 甲賀河の東坂部左京を安協の坂と申し幽霊坂といふ今甲賀大浦  
尾浦のあき川 寺といふ有る一其卵塔の遺址坂友かく名付けし一其  
史を後ふ度嶺坂と改しこより是ハワヨ紅梅坂といふ坂ある云

紅梅坂 大浦隊の東戸田日向邸裏の石の通りの坂あり是ハ辻甚き而  
尾坂ハ紅梅の大樹ありて性未だ枝さしむて喜毎に能觀ありし云と云元の  
樹ハ朽とて今ハ新樹を植ふる

淡路坂 福前山路より昌平橋へむ坂あり其名を一口坂といふ松ヶ下淡路も此  
少住しり淡路坂といふは坂と辻番所の裏に松ヶ下  
有徳君より賜りりし上場あり是より昌平橋を至るは絶景あり  
麻布のあふふ羊洗坂同名りりは坂と堤のりのかつ横の鑑死の人あり享保  
年中のときありし一松ヶ下淡路も伊保先

有徳廟 言とせしふとて其下ハ人魂あふむ堀を見よと云 仰し左  
降りて為堀らんハ三尺と云底ハ赤き塊ありし一松ヶ下其の末を伐り堀を再捨

々ハ其後ハはる事もさうしりし之傳へあり  
幡隨堂院舊地 昌平橋の向家院を安より松永市右衛門を安近の内  
ありといふ今ハ墓所の井戸とありし一井戸有折り骨を堀出さ事あり

近きハ鴨宮氏を安 今ハ春田共と申 骨を多く堀出せし事あり 寛永  
の後ハ昌平橋あり今ハ向 本堂の跡ハ松永市右衛門を安に見えり 幡隨堂院  
宗辰居士を安ふ寺二軒あり 和恩寺にて所長平三松石慶長年中白道上人の開基あり園東十八溪林の月  
白道上人ハ元和元年二月に遷化あり其を遷化あり

妙龍水 松永氏を安の内よりありは遠ハ河をの井戸も用をたはは水の清涼  
ありゆゑ如何ある早寝みも乾く事あり 妙龍女の事ハ世人普く知る云  
今ハ省く 溝ハ直温朝臣妙龍 或ハ池ハ加茂淡路も恭豊朝臣を安の井と  
いふ 按幡隨堂院の板倉の  
尾坂ハ有る一時の事あり

西福寺舊地 寛永九年の繪圖ハ今の戸田日向邸あり西福寺ハ貞譽上人  
開基奉尊ハ安河彌が作如未あり御赤平百石豊後郡の内なり 今ハ概ハ  
西念寺舊地 寛永九年の繪圖ハ今の戸田日向邸の西福寺の隣あり

西念寺舊地 寛永九年の繪圖ハ今の戸田日向邸の西福寺の隣あり



天和年中

一江別 粟古甲賀野洲  
志賀蒲生三島

高三万八千八百石余

同年中

一和別 十市

高又千石

貞享年中

一江別 粟古三島野洲  
志賀甲賀

高三万石或百石余

同年中

一和別 十市

高又千石

高林寺舊地

高林寺ハ松本町澁川氏居處遠ふりしと見ゆ是古山茶水を

秋也一不あり今ハ約込の移りてそ約込ハ皆邸第とある三十年程も昔ハ今の茶

伊之節居處 今早川若狭島居處を以て大保氏の家なり 安祥家もそハハ大保氏の地也

高林寺の葬地とある下

御茶水

天心以ハ約込高林寺今松本町松本丸を其處向りて有りと

わや其高林寺の井戸を山茶水と云ふせらるりより山茶の水といふ名を付り

しとり下あるふる治年中松平隆興も綱宗朝臣 天命を蒙りて御茶水と

林寺後を堀切て澁川流一是を神田川といひ此ふ高林寺の井戸は川の  
向ハの涯ふを流の之残より然る高林寺の神田川ありハ高林寺堀切  
しつみ流と明らかり是ハ堀切の之を他へ移りて高林寺ハ  
御寺移されハ寛永以前ハ高林寺ハ今松本町其處の裏より至  
りハ井戸見ゆありハ高林寺高林寺高林寺高林寺高林寺高林寺  
ハ茶水の駒河原の所ハ高林寺ハ高林寺ハ高林寺ハ高林寺ハ高林寺

金銀水

甲賀町千田元智が家の井戸あり此を安藝と相伝金銀水の記を

作まり

心鳥系

抱坂と云ふハのまき生ありそれを心鳥系といふ高林寺といひ

逸姓古ハ林録ありて細々と云ふありて野稚子心鳥系とも云ふ

名なると云ふ

岩島谷

袋町堀田伊勢も一知朝臣の屋中ふりりハ如美岩峯を其のハ公葉

の境岩世系眉の所ハ連より絶景と云ふハ或云春日氏居處の松平猿樂町ハ

久津見氏を安の勝を古くは音の里といひてさうさうのさふ管谷の  
名も有るはふなり

承久の側 雁本坂下山下流を安のりふ今より水とありて溝あり昔は是  
を承久の側といひて種三十年程以前には袋町の川氷南側の側は南へ  
流す側は北へ流すを承久河川久即を安のりふ溝ありて堤个を神田川  
と名せしといふは雁本坂堀切より一里を承久の側といふ三尺は方位ありて  
井木のときりの有て小川の程に堀ありしとあり

小堀遠江も安政一初居居の石の初藩作御述に國後井徳宗も長政の類とい  
ひ一助解由左傳其の孫也即心次子 伏見の奉承より和歌の冷泉為頼卿の  
始也長家は元和九年 月日遠江の作  
門人太夫事へ古田御心勝室の中よりとありて志も程を寛む殊更古き  
の安政定ふ名あり松花堂昭宗孫林道春法平佐河田春六昌徳とて親  
りの別名を大有すといふ南といひ或は流達庵と号を 大徳寺流達庵ふ茶室也徳  
二年二月六日年以年六十九  
小堀遠江も安政一初居居の石の初藩作御述に國後井徳宗も長政の類とい  
ひ一助解由左傳其の孫也即心次子 伏見の奉承より和歌の冷泉為頼卿の  
始也長家は元和九年 月日遠江の作  
門人太夫事へ古田御心勝室の中よりとありて志も程を寛む殊更古き  
の安政定ふ名あり松花堂昭宗孫林道春法平佐河田春六昌徳とて親  
りの別名を大有すといふ南といひ或は流達庵と号を 大徳寺流達庵ふ茶室也徳  
二年二月六日年以年六十九  
小堀遠江も安政一初居居の石の初藩作御述に國後井徳宗も長政の類とい  
ひ一助解由左傳其の孫也即心次子 伏見の奉承より和歌の冷泉為頼卿の  
始也長家は元和九年 月日遠江の作  
門人太夫事へ古田御心勝室の中よりとありて志も程を寛む殊更古き  
の安政定ふ名あり松花堂昭宗孫林道春法平佐河田春六昌徳とて親  
りの別名を大有すといふ南といひ或は流達庵と号を 大徳寺流達庵ふ茶室也徳  
二年二月六日年以年六十九

此改易とあり  
しあり

室新助直晴字の師禮りとい加賀國の人金澤の儒居たり學問は中領居  
門人白石祇園と市をてて同門あり正徳元年三月十八日石出され初和武百石  
を賜つて直然とすと成徳と号し又駿懸居といひ享保十九年八月十二日  
以年七十九といひて歿

室新助居安の今代室河堀田恒勢もとい馬平左衛門との間の居安あり園根恭を借初助  
居安より十町を室河堀田恒勢もとい馬平左衛門との間の居安あり園根恭を借初助  
家人後氣といふ家内是の發部といふ所よりとありて是を見たりといふ  
のまゝ所の必かりと幸ありといひりは事何の言もたたり

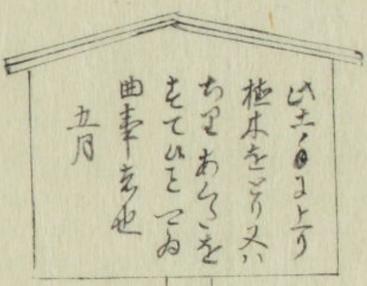
白櫻 甲賀町平塚恒質も 初居屋中よりわり吉野心の種を移し

植りり明和九年火事焼くを伐てその根より生ひて今も大木  
とありたり先年中清水殿居初古右居長尾祐基の寫真をせしりしを  
安ふらつて載す

飯塚氏もこの本 室河町飯塚氏の庭中小あり是樹を大木と名する所の  
初めは遠居ありて山田平とありてはふ代掃事叶はといひり 清徳殿あり

草は制れ 神田川の南岸堤とふわり程坂とふりつれい文字定りあらず  
 經本河辻番所の堤とふりつりの文字明りしすそれ大目付伊豆酒造  
 ありまらるるのあし

小サク



堤上のまり二年よ 後らるる法かりとて世のまはる大目付のふりて賣拂とあや  
 牛車制れ 昌平橋内松平伊賀とて番所の殿より

補遺

駿河屋防火隊

万治二年八月廿一日始て建地坪三十一百七拾七坪 細倉敷 家坪九百拾五坪建坪  
 千百九坪七合又夕 内匠百九十三坪ハ後倉敷ありあ百廿五坪七合又夕ハ 元禄十一年 頼煖  
 明和九年二月廿九日水野之膳勤役中頼煖安永二年普請落成  
 火消役

万治二亥 八月	水野半九郎	<small>又子石之 参合後持</small>	寛文十三丑 四月	水野十左衛門	<small>又子石元 参合後持</small>
延宝四辰 十月	大久保江右衛門	<small>又子石 元後モ</small>	同九酉 四月	安房彦四郎	<small>又子石</small>
天和二戌 四月	横田甚右衛門	<small>又子石</small>	元禄八亥 二月	神保之膳	<small>又子石 後百人</small>
元禄十人十二月	船越又右衛門	<small>又子石</small>	正徳二辰 二月	忌部倉庫	<small>又子石 後書院</small>
享保三戌 二月	永井修理	<small>又子石 後死</small>	同七寅 七月	小出至水	<small>又子石 小普請</small>
享保十二寅 七月	三浦玄蕃	<small>又子石 小水性</small>	同十又戌 八月	内茂外記	<small>又子石 小水性</small>
寛保三亥 三月	高木宮内	<small>又子石 死</small>	寛延二己 又月	石河之税	<small>又子石 小普請</small>

宝曆三酉六月 巨勢六左衛門 又子石 小石性 同九月四月 曾我至水 又子石 小石性  
 明和二酉 八月 水野之膳 又子石元 見且小普 天明元九月 横心内記 又子石元 見且小普  
 同六年 八月 堀田之膳 又子石元 見且小普 寛政六月 戸田大業 又子石元 見且小普  
 享和三亥 九月 戸田内膳 又子石元 見且小普 文化七年三月 米津小吉夫 又子石元 見且小普  
 文化十一戌 九月 戸田内藏助 又子石

○同云 巖有院様御代了治元戌年 初親火消没四組云 仰有於茶水 飯田町 麴町  
 小石川橋通院宗吟小川 同二年八月廿日二組増了駿河基 嵐元同三年十一月廿日八代例所  
 代官町上二組云 仰有寛文二年二月八日市ヶ谷 赤坂 堀池 幸橋 神樂坂 珍番町 又組を増え  
 常憲院様御代元禄八年三月十五日河原町 赤坂 堀池 幸橋 神樂坂 珍番町 又組を増え  
 十八組あり 宝永元年十月十二日七組駿河基 代官町 前元 濱町 神樂坂の又組を減せし其方同心  
 去由帳云 其後徳和入人あり  
 貞享三年 始十月廿三日迄二九泊番云 仰有元禄九年八月二日同所泊番可勤旨云 仰有  
 徳六年七月十九日泊番 仰有

此力 被授了  
 伴源又左衛門 角切カニ 横本丸 廣漢市前右衛門 市字 心平新助 送持  
 伊友久左衛門 九白ニ 三彦葉 鈴木八助 行賣 和田八十郎 角切カニ 水字  
 井上由右衛門 山登 被授了 丸嶋金藏 根尾金左衛門  
 家人忠之侍 中野松之助

田中忠左衛門 勝間友右衛門 鈴木新八 喜鶴勝之助 井上久又郎  
 内田金十郎 心平伊之侍 高橋善之侍 津田常藏 又味和之助  
 喜川勘右衛門 小栗谷善之侍 飯沼次郎 古田熊吉 清水捨三郎  
 長岡新藏 松井芥三郎 櫻井忠兵衛 西村源右衛門 小中源右衛門  
 長田慶吉 中野松之助 青木源十郎 見且 丸心金吉郎

方角

筋遠御門 中竹町遠分外神田口神田ハ今川橋遠分結末遠分谷中遠分谷中遠分馬喰町遠分道筋ハ  
 紅橋遠分昌平橋遠分善不の殿(橋)  
 常盤橋 中銀町中町一石橋 塚町 小細町 濱町 道筋ハ親善遠分  
 神田橋山門を入  
 長服橋 赤坂町 八丁堀 中橋 霊岸橋 道筋 神田橋を入道三橋  
 秋元の殿より  
 熊治橋 京橋 鉄炮洲 道筋ハ辰のハ代別ハ岩山後巻也也  
 赤坂町迄  
 幸橋 赤坂町迄  
 虎ノ山門 芝神明前 新橋迄 かしらけ町 麻布 道筋ハ和田倉を介  
 肥後邸を介 坂下 赤坂外橋田也  
 赤坂山門 赤坂 青山 権田 京 道筋ハ辰の東服一橋竹橋半蔵山門麴町  
 又丁目左之紀列表ハ示

四ツ谷山門

四谷遠敷の橋筋古巻取所神保中橋廻橋

市ヶ谷山門

牛込川田原久保市ヶ谷村道

牛込山門

牛込橋筋町わらわを坂牛込遠道筋袋町橋坂

小石川山門

水道橋と通小石川と通

水道橋

牛天神前陸奥橋小日向水道町信通院茶道  
大塚音調町目白  
牛込元町春日町牛込駒込白

○山手山門新橋喰遠右と下へを鼓をあらをさる

太鼓打様

改月ヶ三ツ拍子打可中事

乃知太鼓又ツ打可中事

迎火あらし早しらせ

直り太鼓改二ツ月鼓三十程打テ赤苗二ツ月のと一打更

赤い事と鼓鐘敷三十程ツ打テ

赤東赤いうち大鐘ありは定敷打及事史録あり？古鐘又ツ打可中事  
大災見極ひ？由曲橋印ありせ赤火勢強くハ連一打太鼓打可中事

見切場

牛所豊川石原中へ深川子後品川白銀巻町麻布  
并橋一平松原橋

古の鰻河巻防火隊

寛文二年二月八日市ヶ谷とらる増益を定永元年十月十三日代官町前完後町

神樂坂ちふ減せしれ細竹の共力同心皆出帳わらわのちふは法廻出入人云

作付する由なり

廣徳寺旧地

防火率井上由右衛門ハ七十七歳ふるまて獲樂たる翁なり

その語ふは防火隊も廣徳寺の舊地ありと云り書見ありといとも老人の語を

聞き下あらしきありいありは寛政 年の事と有らん堀田左膳紀一史

防火隊長の命を蒙りては隊を在勤と一年の事ありと申より石塔一基

を掘出たり事なり是を墓地あり一事はいふあり

甲賀町 或曰甲賀町といふ名ハ平塚伊賀とありの意申の橋ふるると候

たふ多りし番花町といふとありとわら

又按とらふ法恩寺の記録ふカウカタといふ地あり今の甲賀町迄のとら見えれ  
ハ甲賀はカウカタの地せしめ

芭蕉公石

中坊河内刺史の邸中ふありと傳へし先子孫伊賀國より始て江戸小

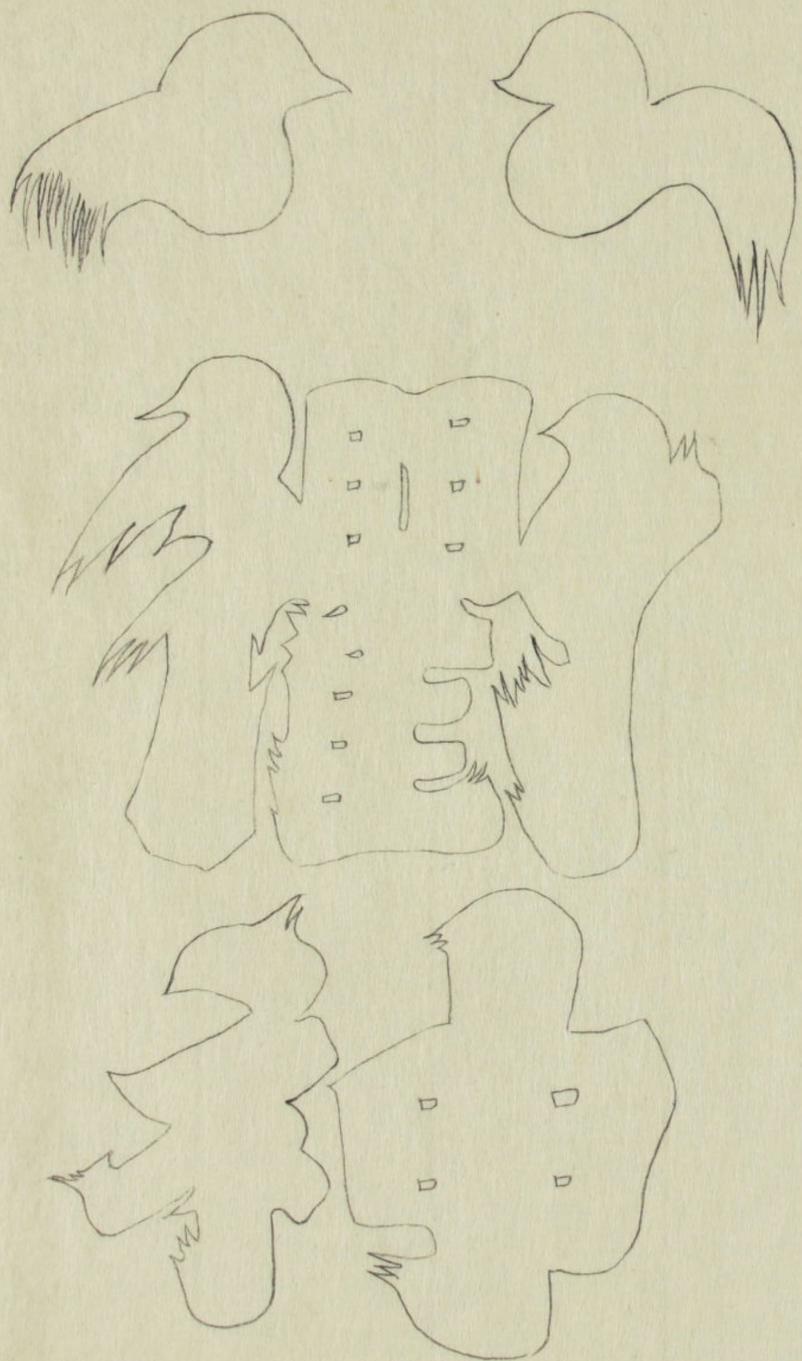


其の形一時は邸中の倉小徑等と之り近き以て芭蕉翁の像と  
 に有る人如新多田乃某師一細らば今其雜落不候と云ふ先年夢を  
 門人黙去らうふ

芭蕉翁の奥田うさよ芭蕉翁

其の形の事と芭蕉翁像といふ小冊を梓以て

平井氏庭中八衢神社額四分白川中將定信朝臣書



寛政六年<sup>甲寅</sup>五月七日<sup>癸巳</sup>書之

# 友少将源定信

吉田稲荷神社 神田川堤とあり

長祿二年の事とあるは吉田内中入道道權の戸城を破るる西九の  
稲荷を造営して山城五口里より移しなるといふ事ぬる昭和九年の災  
かゝる舊社を多く焼失して事蹟定まらぬと云ふ十八年八月

神祖の戸城とあり 入侍の神社をも志すべく駿河島を移し給ふと云

そ地今の稲荷山也 善林氏の居也 其頃ハ別當もあらず社地も定まらず有る事と云ふ洋あり

すこより 按てふ神田神社も慶長八年駿河島に接されしと云ふは地を若林共右馬兼次

賜りて邸の地とすは社も兼次が爲成内は有る事と云ふ兼次が男八右馬兼次

霊社の爲成内はありて常より此の地を以て慶安元年子年より始て

今の所は齋法に奉るとありて其頃ハ神社の丈七尺六寸ありて東向あり今も

門前より並い並い柳の古物ありて殊勝の作あり 碓石城とて時代詳らぬ

慶長十年の事と云ふものと云ふは 近世布衣の事時ふりて追々来る修葺者あり

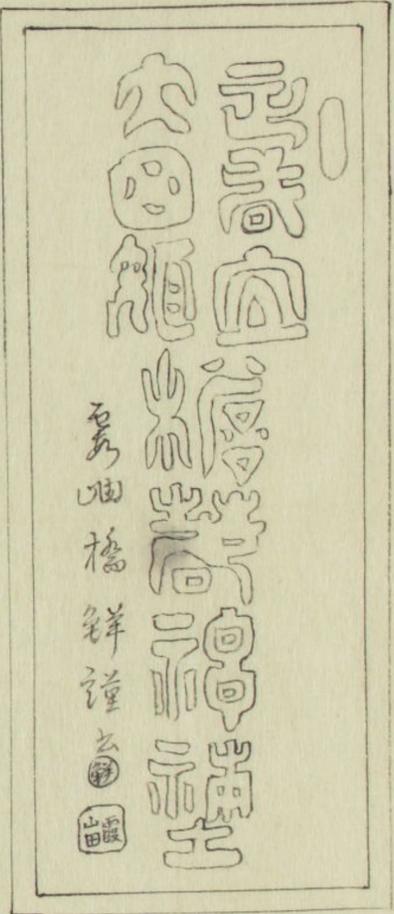
報毎ふは社に名宿に法樂寺若林八右馬兼次其の想をありて我信とす社に



石鶴棲額元正浦原筆あり今ハある後男

書あり

橋鮮といふ歌字  
ありと浦原筆あり  
ありとす字あり  
思恭流とらん



慶長十年乙卯三月

石鶴棲此の對して元正血の  
原筆述世のりのことと云ふ是ありありのり  
のり伊豆國本宮明神の石鶴大祖  
本宮石鶴大祖加納半平のりあり或いひきされ  
ともそのの敬とすことありは深きかたれと云

元正血のりのことと云ふ是ありありのり  
のり伊豆國本宮明神の石鶴大祖  
本宮石鶴大祖加納半平のりあり或いひきされ  
ともそのの敬とすことありは深きかたれと云

石鶴のり石鶴對ひき元正血二年六月十日  
石鶴のり石鶴對ひき元正血二年六月十日  
石鶴のり石鶴對ひき元正血二年六月十日

余嘗傾首於此祠爰干有奉實干神德顯然矣故為報神恩  
為命石工其石如狐而置祠前而彌禱於國家安寧子孫無  
礙正与因賦一絶以聊備不朽云爾  
願主須田町田邊伊兵衛  
石工深川永代岩城屋喜三郎

昌平橋側太田祠長護東城駿臺綏誰識經營道漑意德光  
千歳最神奇 元祿二年己巳  
六月廿日

石鶴のり石鶴對ひき元正血二年六月十日

鹽盤ととのいお社の角にあり是は市谷田町二丁目尾根を小左馬角田を  
 半有邊の 水戸尾根を小左馬の 紀州の舞の山用達法左邊といふ所の三人として  
 元禄の辰年一二月和の災ふありと移下らんを今の辰辰瀬田町  
 三河屋吉助女の疵瘡を祈りなり靈験を多り一山にありとて  
 天満宮 又天満宮の伊宮あり勧修の時詳あり  
 稲荷社 三尺四方の伊宮あり當社のお社の山着屋あり  
 八幡宮 勧修の時定りあり  
 疵瘡神社  
 神樂月並十八日お執事を神事行時より奥のまを今の安室院  
 奉りしふまを定りありす院を初年の時柳志麻といふ神人ありて月毎  
 おまをて執事しりりし志麻の七十歳の男ありとて一山に志麻の始  
 ありとて一山に神樂も元禄より祈ひありとて一山にあり  
 右駿河志一巻得友人の濟養成平澤本使騰寫以収干待賈堂維時萬延

辛酉歲三月と辭

江戸書會

活東子識

明治二十歲 丁亥初冬

筆者

妻 木頼徳



